Roughing It におけるペルソナとしての Mark Twain

木　村　仁　美

はじめに

1872年に出版された *Roughing It* は、1869年の *The Innocents Abroad* につづいて書かれた、長編旅行記としてはマーク・トウェインの２作目の作品である。*The Innocents Abroad* が聖地エルサレムを目指して地中海を遊覧する旅行記の体裁をとっているのに対し、*Roughing It* はマーク・トウェインが1860年代前半の西部の地でさまざまな苦難をしのびながら文筆家となるまでの過程をつづったものである。作品は語り手の「わたし」である「マーク・トウェイン」が1861年の夏、兄とともに西部のネヴァダに向けて出発するところから始まっている。駅馬車での旅を経て、ネヴァダのカーソン・シティに到着。「わたし」はそこで銀鉱山の探索に没頭するが、投機により破産。それを機にヴァージニア・シティの『テリトリアル・エンタプライズ』紙で新聞記者となる。1864年、ジャーナリストとしてサンフランシスコへ移るが、株の暴落で再び破産。しばらくの間をおいて、サンドイッチ諸島を取材。それからサンフランシスコに戻ると講演者（lecturer）として出発し成功するまでの記録である。この作品は1861年から1866年にクレメンズ[1]が実際西部で経験したことを基に書かれているが、出来上がった作品は単なる自伝であるとも回顧録であるとも言うことができない。それはむしろ10年前の「トウェイン」である「わたし」が語るフィクションとしての旅行記である。

しかしこの作品でやっかいなのは10年前の「わたし」が語るフィクションの間に、10年後の「わたし」が語り手として10年前の西部を読者に向って説明する部分が入りまじることである。これはドン・フローレンスが、トウェイ

ンは *Roughing It* において、「わたし」に理解し難い西部と同じくらい複雑で変わりやすい（complex and fluid）語り方をさせて、変幻自在なペルソナ（fluid persona［Don 14］）を創り上げた、という主旨の解説を行っている点にほかならない。

トウェインが西部の地で『エンタプライズ』紙をはじめ数々の新聞に掲載していた実際の記事は *Early Tales & Sketches* に収録されている。これを読むと語り手と作者の間にある距離のとり方がさまざまに試みられていたことがわかる。記者から小説家となっていくトウェインは、*Roughing It* において語り手と作者の距離のとり方を会得して、後の小説作品に応用することができたのではないだろうか。本稿では特に *Roughing It* の中の48章と49章、52章、その章に活用されている *ETS* の中の二つの記事「スペイン人の鉱山」（1862年10月下旬ヴァージニアシティ『テリトリアル・エンタプライズ』紙掲載）と「スミス対ジョーンズ」（1864年６月26日付けサンフランシスコ『ゴールデン・エアラ』掲載）を比較して考察する。まず「スペイン人の鉱山」と「スミス対ジョーンズ」における語り手と作者の間にある距離のとり方によってどのように笑いが生み出されたのかを分析する。そして *Roughing It* になると、作者と語り手の距離関係がどのように活用され、またどのような効果が生み出されているのかを考える。その結果、新聞記者から小説家となっていく過程でのマーク・トウェインの成長をたどることができればよいと思う。

1．

「スペイン人の鉱山」（“The Spanish Mine”）は鉱山の採掘現場を詳細に説明した記事である。ある日語り手は100フィートの鉱脈を含んだ採掘現場へ取材に行く。トンネルを奥深く行ったところからはしごで縦坑を降りていく。格子に組まれた太い木材の足場を見ながら穴の一番底へと進んでいく。そこではしきりをつけられた鉱脈の壁があって、鉱夫たちが二輪の手押し車に鉱石を積んで運んでいる。ごく簡単に言えばこれだけの内容であるが、読者はまじめな態度で語る語り手とその報告内容の間にずれが生じていること

に気がつくだろう。

まずトンネルの中を250フィート（70M)、ろうそくの明かりだけで進んでいくと一頭の馬に出くわす。

> This horse works a whim used for hoisting ore from the infernal regions below, and from long service in the dark, his coat has turned to a beautiful black color.（ETS 1 164）

馬の外皮はもともと黒い色をしていたか、語り手が暗がりで見たために黒く見えただけにすぎない。語り手が状況把握をできなかっただけであるのに、大変なこととして真剣に話す様子は読者にとって滑稽に感じられる。

つぎに、そこからはしごを降りていくと18インチ平方の材木が張り巡らされた「迷宮」のような場所がひらけている。この「迷宮」を作るための材木がどうやって運ばれたのか、どれほどの莫大な費用がかかっているのだろうかと語り手は考える。語り手の頭の中ではどんどん想像が膨らんでいく。

> You wind up with a confused notion that the man who designed it all had a shining talent for saw mills on a large scale.（ETS 1 165）

人間と同じぐらいの太さをした木材の足場は語り手の想像を絶するものであった。いろいろ考えているうちに混乱してしまった語り手が最終的に思いつくのは製材所の大型版であり、読者は語り手の想像力のとぼしさに笑いがこみあげてくる。さらに想像はふくらんでいく。

> If . . . you can by any possibility make out to understand it, then you can render the information useful above ground by building the third story of your house to suit you first, and continuing its erection wrong end foremost until you wind up with the cellar.（ETS 1 165）

これは地下に作られている足場が上から下にできていくのなら家の建設にも応用できるという、あまりの連想の飛躍をまじめに語る様子がこっけいに感

じられる例である。

そこからさらに170フィート地下におりていくと、鉱石が切り取られ次から次へ運ばれるところが見られる。その気になればまだまだ下へおりていくことも可能である。語り手の解説を次で見てみよう。

> . . . and you may get into a bucket, if you please, and extend your visit to the confines of purgatory — so to speak — if you feel anxious to do so; but as this would afford you nothing more than a glance at the bottom of a drain shaft, you could better employ your time and talents in climbing that corkscrew and seeking daylight again.（ETS 1 166）

いままで熱心に足場についての観察を報告していた語り手は、さらに縦坑を降りていっても同じであることに気づく。そうなるとあっさりと観察を切り上げるので読者は肩すかしを食わされたような気分になる。

「スペイン人の鉱山」においてはこのような語りのせいで、危険と隣り合わせにある採掘現場がおもしろい想像を提供する不思議な地下世界となってしまっている。淡々とした語りとその空想的な報告内容の間にあるずれは、語り手の無知をさらけだす。しかし実際のマーク・トウェインは新聞記者になる以前は鉱山の投機によって一攫千金の夢をかけていたのだから、作者は知識のない語り手を装ってわざと的の外れた感想を述べさせていることになる。「スペイン人の鉱山」は無知な語り手という作者とは違ったペルソナが見たままの感想をまじめに書いて読者の笑いを招く書き方の一例である。

2．

「スミス対ジョーンズ裁判での証言」（“The Evidence in the Case of Smith vs. Jones”）は「スペイン人の鉱山」とは違って語り手が一段高いところから語り、地位があり高潔だと思われている法廷の実態を斜めに見ているスケッチである。「マーク・トウェインによる記録」という副題をつけられているこの記事は、スミスとジョーンズのどちらが先にもめごとの発端となっ

たかを争う裁判について、各種日刊新聞に掲載された記事は曲解したものが多いとわかったため、証人喚問の記録を忠実に再現するので、判事にも出来なかった公平な審判を読者に任すという旨を断り書きする。

最初の証人はジョーンズ側のアルフレッド・ソウベリー氏である。彼は騒動が起きたときに同じ酒場にいたことからスミスがはじめにジョーンズを殴り倒したことを主張する。しかし彼の俗語（"I see this man Smith come up all of a sudden to Jones, who warn't saying a word, and split him in the snoot" ETS 2 15）はお上品な弁護士に通じないので実演をしてみせようとする。

> Now, for instance, as if you was Jones and I was Smith. Well, I comes up all of a sudden and says I to your Honor, says I, 'D — n your old tripe — '" [Suppressed laughter in the lobbies.]（ETS 2 16）

弁護士は原告のスミスが被告のジョーンズをなぐったか否かを yes か no で確かめたいだけであるのに、なかなか簡潔な返事に至らない。ソウベリー氏は退場させられてしまった。一見ソウベリー氏は場を乱しているだけのように見えるが、法廷の雰囲気にも臆することのないふだんと変わらないしゃべり口調は滑稽であるだけでなく真実味がある。

次の証人はスミス側のマクウィリアムソン氏でこの人はジョーンズがリボルバー（輪胴式拳銃）でスミスの頭を狙って７、８回撃ったと言う。しかし裁判官にピストルの種類は何だったかと尋ねられると今度はデリンジャー（一発式の懐中用ピストル）だと言う。ピストルの種類の変化を指摘されると自分の証言の矛盾に驚いて銃を発射したのは一回だったと言い直す。そして本当に頭を狙っていたかという裁判官の問いに足だったと言い直す。威圧的に問いつめられてしどろもどろになる様子が伝わってくるが、これではどの証言が本当であるのかわからない。

三人目はワシントン・ビリングズで乱闘は酒場ではなく通りで行われたと言う。お互いが狙い損なって溝におちたあと、スミスが先に立ち上がると小石をつかんでジョーンズに投げた。それからジョーンズがスミスの腹に向

かって突進したと言う。4人目がジェレマイア・ドリスコルで騒ぎの場所は酒場でもなく通りでもなく広場だったと言う。そしてどちらが先にけんかをはじめたのか、止めたのはどちらだったかわからないと言う。その他にもスミスが先に攻撃をはじめたと言う証人がいるかと思えばジョーンズがけんかをはじめたと言う証人もいる。武器は素手、ナイフ、トマホーク、棍棒、斧、ビアジョッキと椅子と言う人もいればけんかはなかったと言う人さえいる。ただ一つ共通している点はけんかの原因が2ドル40セントで、どちらかがどちらかに貸したのであるがそれを知るのは不可能である。

ほとんど井戸端会議のような証人喚問であるが、裁判官は厳かに事件の証言は自分が毎日35ほど扱う事件の証言と非常に似通った点が多いと言う。したがってさらなる証言を集められるように審理を続けることにすると宣言した。語り手は以後数日取材に行った結果一つの結論を得たと言う。「警察裁判所判事は利益の多い快適な仕事である。しかしそれにはかつて英国のハンターが弾薬の不足している状況でインドの虎と戦うことについて言ったように、『ちょっとした欠点』がある。それは警察裁判所判事が正気のときに証人の話を聞くことは大変なことにちがいないというものだ。」判事の仕事にとても同情したふりを見せながら、語り手は「わたしはむしろ金持ちの鉱山会社の秘書になって、収入査定を表示したり収集したりする以外はするべきことをもたず、おとなしく正しく生きたいものだ。神の高潔な働き手の一人となって自分のものではない1ドルにとびついたりはしない」と言う。このように判事に対する心情をさんざん吐露してから語り手の「わたし」は「おや、わたしには皮肉を言う才能は全くない。そんなことには向いていないのに」とひらきなおって見せている。しかし読者には判事が法廷を開き、証人喚問をして裁判を長引かせるのは名誉と収入が増していくためであるのを「わたし」が皮肉っていることに十分気がつくだろう。

さらに「わたし」は証人喚問の記録をそのまま読者に託すので正しい判決が出せることを確信していると言う。民衆に判決をゆだねた方が確かであると断言して、形式にこだわり証言をさらに集めようとする判事を徹底的にか

らかっているのである。

「スミス対ジョーンズ」の語り手は一歩離れたところから冷静な視線を向けて冷めた感想をぴりっとさしはさむ。それでいながら話ことばを忠実に再現してみせて厳粛な場所であるべき雰囲気を笑いでかき消してしまう。「スペイン人の鉱山」とは違う視点に立った「わたし」の語り方を見ることができるだろう。このように距離のとり方を自在に操って対象を皮肉っているところに、読者に笑いをもたらす目的に徹したマーク・トウェインの姿が見える。これらの習作を基に、1872年に出版された *Roughing It* では、作者が富と栄光をもたらすかに見える西部に翻弄された10年前の語り手の「わたし」になりすまして、そこでの経験をおもしろおかしく語っている。そしてそうすることでむしろ作者は人間のもつ愚かしい部分を克明に浮かび上がらそうとするのである。次ではそのことについて考察しようと思う。

3.

「スミス対ジョーンズ裁判での証言」では、西部の人たちの証言を話ことばで再現することによって、がさつでいいかげんだが威勢のいい人々と荘厳な態度で法廷に臨む法律家たちとの対比をすることができたが、裁判制度を茶化す程度にとどまっていた。ETS の中には裁判や殺人事件、けんかによる騒動を報道しているスケッチが数多くあり、当時の西部ではいかに暴力と混沌が渦まいていたかが窺われる。スミスとジョーンズの騒動事件のようにささいなことが原因でけんかをするのはふつうであった。その一方で荒くれ者たちを統制する側である法と規律もいい加減であったといわざるをえない。*Roughing It* では語り手である「わたし」が無法者気質を語る際に、ネヴァダ政府のずさんな実態をおもしろおかしく描いている。そこでは「スミス対ジョーンズ裁判での証言」のときにはあいまいにされていた法の不正義がユーモアによって赤裸々に暴露されることになる。

48章の冒頭には「ヴァージニアシティの墓地の最初の26基の墓は殺された人が眠っている」とある。そして「ヴァージニアシティの最初の26人の墓地

に眠る人々を殺した男たちは決して罰せられなかった」と言う。この章は無法者気質について言及しているようでありながら無法者のみならず法のいい加減さについて糾弾している。

語り手は陪審制度の間違いの発端がアルフレッド大王の世にまでさかのぼると指摘している。大王の時代はニュースがそれほど早く行きわたらないので、事件について何も知らず偏見のないまじめで知性ある人を陪審員として簡単に探すことができた。しかし今日では電報も新聞もあるため、正直者と頭脳明晰な人は完全に陪審員から除外されてしまうことになる。例えば有名な無法者が最も卑劣なやりかたで善良な市民であるB氏を殺害した場合、新聞はその記事で埋め尽くされ誰もが知るところとなる。しかし陪審員に選ばれるのは殺人事件を聞いたことがなく、それについての話を誰かとしたことがなく、何も意見や考えを持たず新聞も読んだことがない人だけでなければならない。これに対して「わたし」は「家畜もインディアンも道路の砂利さえ殺人のことは知っているのに！」と憤慨する。当然家畜や道路の砂利が事件について知っているということは誇張であるし、それらとインディアンを同じ扱いにしていることは問題である[2]が、ここではいかに「陪審制度が知性と誠実を駄目にし、無知と愚鈍と欺瞞に拍車をかける」のかが主張される。そしてほとんどの判決は無罪なのだ。

ここで無法者（desperado）について言及しておく必要がある。*Roughing It* の中で扱われる代表的な無法者と言えば10章で「わたし」が遭遇するスレイドである。スレイドは実在した人物がモデルにされており、「わたし」によれば26人もの人間を殺したことがあるばかりでなくオーヴァーランドの駅馬車会社の管区監督という重要なポストについている。つまり、暴力が法であり、実力のみが権威と認められる物騒な地域の用心棒である。しかし、語り手の「わたし」は、「わたし」にとって未知の世界であった西部を語るとき、西部を示す特徴的な気質を「無法者気質」（desperadoism）とし、またそこに生きる人々が殺し屋ではなくても血気にはやるがざつな性質を備えている場合、「無法者」と呼んでいる。F. G. ロビンソンは「わたし」が旅の初期の

段階でスレイドと出会うことが、まぎらわしい幻想で出来上がった世界（西部）に直面していく語りに必要なプロローグだと言う。スレイドの物腰は紳士的である。そうでありながらだれもが恐れる非情な男である。また悪党どもを射殺してその報復をも恐れない英雄である。そうでありながら死に際に泣き叫ぶ臆病者のような面を持つ。こういった姿は表面だけで信用をすることが出来ない人間のふるまいにおける「不可思議ななぞ」（conundrum）である。(33) このことから考えると鉱山の採掘にあけくれる男たちは富を象徴する鉱山に夢をかけて意気込む働き者である一方、うさをはらすために酒場で暴れる「無法者」である。そして合衆国政府は準州新政府に対して「飾らない愚直を冷たくあしらい、技巧を凝らした悪業にはあまい」(25章)。西部を統括しようという新政府もまた名誉を求めて議員になりたがる「無法者たち」で成り立っていた。こういった人たちは皆表面だけでは判断できない「不可解ななぞ」であると言えるだろう。

49章ではこうしたさまざまな無法者たちが実際にどのように法の下で裁かれていくのかが「発砲騒ぎ」、「窃盗と乱闘騒ぎ」そして「殺傷事件またも」という三つの新聞記事を引用して示されている。まず「発砲騒ぎ」では、保安官代理のジャック・ウィリアムズがブラウンという酔っ払った男に命を狙われていたがブラウンの方が撃ち殺された。誰に撃ち殺されたかはわからない。次に「窃盗と乱闘騒ぎ」の記事では、先の記事で保安官代理と言われたジャック・ウィリアムズが酔っ払ったドイツ人を殴り倒し70ドル奪いとったと書かれている。そして「殺傷事件またも」という記事の引用の前に語り手は後にこの事件の中心にいる人物であるジャック・ウィリアムズが殺されたという情報を与える。三つ目の記事では、ジャック・ウィリアムズの死について友人二人が、一方はジャックは何の知らせも受けずに殺されたと言い、もう一方がジャックはやられることを予告されていたと言う。意見の相違でけんかがはじまると、はじめの男は後の男に殺されてしまった。(49章)

49章で引用されているこれら三つの記事の内容は ETS のスケッチ「スミス対ジョーンズ裁判での証言」の内容と似通った設定で事件が起こり、かつ

あいまいな証言が目立つ。どちらの事件も敵対関係にある人物はどちらが先に問題を起こしたのかがわからない。そしてけんかの原因は些細なことにすぎないと思われるが暴力へと発展していく。しかし、「スミス対ジョーンズ裁判での証言」では裁かれるスミスとジョーンズの素性が書かれていない。三つの一連の記事はジャック・ウィリアムズが無法者であるということを強調している。ジャックは「保安官であり追はぎであり無法者であるという三つの肩書きを同時に持っている」と「わたし」は解説する。無法者が引き金になって殺人が殺人を呼ぶ図式ができあがるのは見てきたとおりであり、さらに生き残った者たちがほとんど無罪になるのは、法廷に携わる人間たちが都合よく権威をふりまわしているからである。肩書きで武装した「無法者」の姿がここにある。このように48章と49章は無法者について語りながら実は裁く役目を担った法廷が無法であることを断定した。そして西部の無法者気質とは何かという問いをなげかけながら、人間の内に潜む愚かしい部分を見つめていこうとしている。このことについて次では、先に一言触れた「鉱山の採掘にあけくれる男たちが富を象徴する鉱山に夢をかけて意気込む働き者である一方、うさをはらすために酒場で暴れるような『無法者』」であるという点について、語り手の「わたし」の実態と比較しながら考える。

4.

Roughing It の後半部分では49章のように当時読まれていたと言われる新聞記事がしばしば引用されている。52章でも「わたし」は鉱山に関する記事を引用している。この章には ETS のスケッチ「スペイン人の鉱山」が活用されている。52章に至るまでの「わたし」は、ついに仲間とともに隠れ鉱脈を発見したにもかかわらず法的義務を怠って無一文になってしまった。暇つぶしに新聞社へ書いて送った手紙がなぜかいつも掲載されて、ある日『エンタプライズ』社から編集者として採用されることになった。52章は「わたし」が記者として腕をあげてきたころの自分をふりかえりながら、1863年という好景気時代のネヴァダがどのような状態であったのかを、鉱山の面から語る

章である。

まず語り手は1863年の好景気時代にどれほどの銀が採掘されて、取引され、運送会社が繁盛したのか数値を挙げて解説する。次に鉱山の採掘現場はどのようになっているのかを再現してみせている。そして最後に陥没した鉱山を取材した当時の語り手の新聞記事が抜粋されている。採掘現場の様子は「スペイン人の鉱山」と同様に一つの地下の迷宮にたとえられる。

> Over their heads towered a vast web of interlocking timbers that held the walls of the gutted Comstock apart. These timbers were as large as a man's body, . . . It was like peering up through the clean-picked ribs and bones of some colossal skeleton. (R. I. 356)
> Imagine this stately lattice-work stretching down Broadway, from the St. Nicholas to Wall Street, and a Fourth of July procession, reduced to pigmies, parading on top of it and flaunting their flags, high above the pinnacle of Trinity steeple. (R.I. 357)

これらの発想の奇抜さはまじめな様子の語り手と対照をなしているので読者はおもしろいと感じることができる。しかし「スペイン人の鉱山」の場合とは違って、この章の語り手である「わたし」はさまざまな経験を経てきているので無知ではないということを読者は知っている。10年前の「わたし」は鉱山熱にとりつかれて採掘に没頭し破産までしたのだ。それなのに語り手はそれには触れず鉱山の様子を客観的に語るので、華やかな夢にまどわされていた愚かな10年前の「わたし」の姿は読者の目から隠されるのである。「スペイン人の鉱山」では突飛な比ゆ表現が無知な語り手のはじめて知ったという驚きをきわだたせるために使われていたが、52章では鉱山について語る語り手が経験を積み自信にあふれた態度で鉱山現場の臨場感を伝えようとするための大げさな比ゆ表現となっているのである。つまり「スペイン人の鉱山」では無知な語り手と作者の距離によって読者に笑いをもたらすことが目的であったのに対して、*Roughing It* の52章では同じような語り方であるにも拘わらず、語り手が語り手としての権威を持って鉱山の実態を読者に伝えよう

としているかのように読める。しかし読者はそれが同時に10年前の「わたし」の愚かぶりを浮き彫りにする策であることにも気付かねばならない。

なぜなら、語り手は淡々と採掘現場の様子を描いた後で『エンタプライズ』紙に書いたという鉱山での体験記の抜粋を引用する。タイトルは「陥没現場での一時間」である。その内容は「スペイン人の鉱山」を思い起こさせる気楽な報道となっており、採掘現場の陥没状況をつぶさに見てまわった後で語り手は「汗と油にまみれながら昼食を食べた」としめくくられる。数字を並べ細かい説明をすることで無知ではないことが印象付けられてきた語り手のイメージによって、このかつての記事を書いた10年前の「わたし」は「スペイン人の鉱山」の語り手以上に無知であるということが強調される。52章のはじめで「読者は必要がないと思ったら読み飛ばしてください」ともったいぶった調子で好景気時代を語る現在の「わたし」と10年前の無知で愚かだった「わたし」との差が浮き彫りになるわけである。

こうして10年前の「わたし」は鉱山採掘に明け暮れる他の西部人にもれず幻想に包まれた夢を追い求める「不可解ななぞ」である人間の一人だということが明らかになる。このように52章は西部について達観したような口調の語り手によって、かえってそれまでの章を語ってきた10年前の「わたし」の愚かぶりが読者に再認識されるのである。したがって *Roughing It* においてトウェインは新聞記事を書いていた時よりさらに複雑な仕掛けをして笑いの裏にある意味を引き出していったということができるのだ。

まとめ

Roughing It 以降トウェインは、*Adventures of Huckleberry Finn*（1885）、*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*（1889）といった傑作を発表していく。これらの作品の魅力の一つは語り手と作者の間にある距離のとり方であり、*Roughing It* はその前段階となる作品ということができるだろう。*Roughing It* が単なるマーク・トウェインの自伝にも回顧録にもとどまらな

いのは、それが「わたし」の語る旅行記というフィクションであるからだ。そこには当然語り手と作者の間に距離が生まれてくる。トウェインは物語の語り手と同様、鉱山投機による破産をきっかけに新聞記者となった。そして新聞記者時代に語り手と作者の間にある距離のとり方によって読者を楽しませる技術を模索していく。「スペイン人の鉱山」に見られるように距離が離れている場合、「スミス対ジョーンズ」に見られるように一段高いところからアイロニックな目を向ける場合とさまざまである。それが *Rouging It* になるとペルソナを自由自在に操れるようになることで事実と虚構の境目をあいまいにすることに成功した。そしてペルソナの語りによって実際以上にリアルな世界が創作されるとそこで動き回る人間の本質的な部分を見やすくしていく。その結果、*Roughing It* は広大な西部を舞台に未熟でまぬけな語り手の笑える楽しい話が語られているだけではなく、人間のどうしようもない愚かな部分を認識させられる物語へと深化した作品であると言うことができるのだ。

Notes

本稿は2005年11月５日京都女子大学英文学会大会において口頭発表した原稿を大幅に書き直したものである。

1．サミュエル・クレメンズがはじめてマーク・トウェインのペンネームで作品を発表したのは1863年である。
2．ウォナムによれば、カルチュラル・スタディーズの分野から *Roughing It* を批評する場合、19世紀半ばのアメリカで一般的であった人種差別的な考えをトウェインは無批判に利用したと説明される。10年前の無知な「わたし」の意識だからと弁護するにはあまりに無批判な差別意識が散見されるのは間違いない。

Works Cited

Florence, Don. *Persona and Humor in Mark Twain's Early Writings.* Missouri: U of Missouri P, 1995.

Gerber, John C. *Mark Twain.* Boston: Twayne Publishers, 1988.

Robinson, Forrest G. "The Innocence at Large: Mark Twain's Travel Writing." *The Cambridge Companion to Mark Twain.* Ed. Forrest G. Robinson. Cambridge: Cambridge

UP, 1995.
Twain, Mark. *Mark Twain's Letters*, Vol.1. Berkeley: U of California P, 1988.
——. "The Evidence in the Case of Smith vs. Jones." *Early Tales & Sketches*, Vol. 2. Berkeley: U of California P, 1981. 14–21.
——. "The Spanish Mine." *Early Tales & Sketches*, Vol. 1. Berkeley: U of California P, 1981. 164–166.
——. *Roughing It*. Berkeley: U of California P, 1993.
Wonham, Henry B. "Afterword." *Roughing It*, by Mark Twain. New York: Oxford UP, 1996.